

# グローバリゼーション下の地域研究の新たな課題

濱 下 武 志

はじめに——すべての研究の前提としての地域研究

1. 地域と地域研究
2. グローバル時代の地域研究
3. 変化する地域主体と新たな地域研究
4. 海洋視野からの地域研究
5. 地域研究と学問分野
6. グローバリゼーション下の地域研究

おわりに——「地域」は「知域」に通ずる：地域研究をめぐる新たな課題

## はじめに——すべての研究の前提としての地域研究

なぜ特定のある地域を考えるのか、その必然性は何なのか——自らの関心やそれが役に立つか否かという視点を離れて——、いかなる必要性があるかという観点に立ったとき、地域研究に取り組む動機はどこに見いだされるのか。個別のケース・スタディーが数多く積み重ねられていく中で、やはり学問分野における地域研究の基本的かつ一般的な方法問題の再検討も同時に進める必要がある。とりわけ、グローバル化した現在では、地域のアイデンティティは多様な広がりを見せているといってよい。これは地域研究を地域化するという意味では非常に重要かつ基礎的な条件であり、必然的な動向でもあるということを強調しておきたい。

また同時に、大学という場で地域研究の人材をどのように育成するかという問題も出てきたように思われる。地域研究について議論するときに、地域研究において良い研究と悪い研究は何によって決められるのかという疑問が生ずる。なぜなら、あなたの地域はよくて私の地域は悪い、というような研究対象としての地域の比較はできず、地域はみな“対等”であるはずだ。したがってこれまでのような学問分野別に、また基礎から応用へと細分化されて構成されている大学という枠では、地域研究を系統立てて評価できる基準を持っていないという状況がある。

大学は学問分野をもとに構成されており、その条件の中で——それがすべてだとはいえぬが——人材育成を行ってきた。これまでの大学の必要性は低くなりつつあるか

ら、地域研究を地域化するという新たな領域に大学が役割を発揮すれば良い、という方向に大学を地域の大学へと変えてゆくということも一つの考え方であろう。他方で、学問分野の研究それ自身をもう一度考え直さなければならない、という議論も同時に必要である。大学の役割・使命・人材育成の評価方法が地域研究には適用され難いものだとするならば、現地に、また対象そのものに密着するという地域研究はあくまで前提であって——つまり私たちは大学という場であろうと地域という場であろうと誰もが地域研究を前提として教育・研究や社会活動をおこなっているのだという前提のもとに議論をすすめるのであって——必ずしも地域研究の目標や方法、検討のプロセスについて共通の議論ができるというものではないと考えなければならないのかもしれない。地域はそれほどに多様であり、それに伴って地域研究の課題も多様であるからである。

このように地域研究をめぐる教育や研究に関するさまざまな問題が出てきているのが現状であるが、これは一面ではグローバリゼーションの中にあっては必然的な状況であり、その動きを止めることはできない。もし地域研究がすべての研究の前提であるとするならば、その上に立って何をするのかということを考えなければならない。そこでは、地域研究をどのように地域化するのか、また地域の主体はどのように新しく考えられるのか——このようなところにもまた注目すべき課題があるのではないか。つまり私たちが現在進めている——あるいはこれまでに進めてきた——いわゆる地域研究にかかわる分析はすべて前提であって問題はその次に何をどのようにおこなうのかということこそが求められるべき地域研究の出発点であるのだ、ということをもまず強調しておきたい。

## 1. 地域と地域研究

日本における「地域研究」は、戦後アメリカのアジア政策とアジア研究が、Area Studiesとして進められたことへの批判的導入から出発し、独自の観点からの展開を遂げてきたとされる。学問分野の研究でも、ヨーロッパを中心とした人文・社会・自然科学の方法、すなわち学問分野の分類をより細分化してきたというあり方に対して、総合的な把握が困難であるということからやはり大きな疑問が投げかけられている。西洋中心主義に対する反省から、学問分野をもう一度考え直すというきっかけがあり、そこからアジアに視線が向けられアジア研究が声高に叫ばれることとなったが、内容と対象はアジアでも方法は欧米の分析概念に依ったものであるというのが実情でもあった。さまざまな試みがアジア研究の中でも学問分野として進められてきており、ただ単にヨーロッパ中心主義ではなくてアジアだ、というような議論の構図はもはや成立しない。学問分野の問題はけっしてアジアの地域研究だけの問題ではなく、欧米も含めた世界的な問題になっている。18世紀の半ば以降の学問分野の体系を今どういう観点から議論し考え直すべきか、それをグローバリゼーションという条件の中で、あるいは地域研究の多様化・アイデンティティの

多様化という条件・環境の中で考えていくという課題が大学・研究者につきつけられているのではないだろうか。

したがって、私たちは地域研究を推進するという役割を担っていると同時に、私たちが行っている地域研究という学問分野の意味についても考えなくてはならない。地域研究はマルチ・ディシプリンの学問領域であるといわれてきたが、どのような学問分野に意味があるのか、あるいは学問分野の総合はどのように考えられるべきなのか、という課題に対して同時に議論が行われなければ、大学の持っている役割、あるいは地域研究が持っている研究のうえでの評価・位置づけがその時々状況に流されてゆくということになりかねない。

いま、これらの両者を意識した問いを投げかけてみる。たとえば、「北東アジアを研究する」というときには、国際関係論や経済学そのほかの学問分野に基づいたアプローチが考えられる。しかし、「北東アジアを地域研究する」とことはどこが異なるかという問いが提示されるとき、そこでは「北東アジアを研究する」というだけではなく地域研究という方法が問われている。また、「北東アジアを地域研究する」ということに加えて、「北東アジア地域を研究する」というときには、今度は〈地域〉という空間概念をどのように捉えているかという問題意識が前面に出てくる。周知のように、〈地域〉という概念をめぐるさまざまな議論があるが、〈北東アジア地域〉をどのように考えたうえでそれを研究するのかという方法的手順が問われるわけである。

さらには、「北東アジア地域を地域研究する」——同義反復のようではあるが——ということを考えてするならば、地域空間としての北東アジアという議論と、方法としての北東アジア——これはさきほど宇野教授がおっしゃった〈個別〉と〈普遍〉ということの別の表現であるともいえようが——この二つを同時に考える必要がある。

もし「北東アジアを地域研究する」というときと「北東アジアを研究」するということに、同じ答えしか出せないのか、あるいは違う答えが出てくるのか。この点についてはまだ疑問符がついたままである。かつて『地域の世界史』（山川出版）という全12巻のシリーズの編集に参加したことがある。世界史を地域史の観点から捉えなおすことを意図したものであった。〈地域〉という概念あるいは〈地域〉という枠組み、〈地域〉という条件を通して見た時に、これまでの歴史研究の視点や方法とどこが異なってくるのかということをしてできるだけ意識できるかという課題の試みであった。ただし、そこでは東アジアなどの地域区分がすでに前提とされる場合もあり、結果としては、たとえば東アジア史研究と東アジア地域史研究の間には、その地域に特有の「地域性」を問うという問題関心からの区別は依然として残されている課題であるように思われる。さらには「地域間比較」という視点も、地域研究に不可欠な課題であると思われる。地域研究は、ある意味では具体的な地域描写や地域ナラティブに陥りかねないという側面を持っていることから、複数の地域を比較検討したり、地域複合を構想することによって、地域を研究対象へと高めるという課

題である。

## 2. グローバル時代の地域研究

地域研究の特徴のひとつに、それがローカルな事象を扱うことも多いことから、〈地域〉は〈地方〉として、また国家やグローバルといった次元より身近な生活の場としてイメージされる場合も多い。たとえば〈地域〉というイメージを考えると、地域と世界の結びつき、あるいは私たちの地域、ある地域における文化の結びつきと外部世界とのつながり、という〈地域〉などが想定されていることが多いように思われる。しかし、〈地域〉には非常に広い地域もある。また、グローバリゼーションの一つの大きな特徴は、国家を地域化したという点にもあるのではないかと思う。以下に、グローバル時代における地域の位置づけの変化を図示してみる（図1参照）。

伝統的には、近代国家の基本のひとつである領域国家を単位として、国家を中心に世界が編成され、地域が序列化されており、左側のタテ系列で空間秩序が系列化される形で編成されていた。地球あるいは〈グローバル〉とは、これまで国際関係あるいは世界という枠組みを前提として理解されてきた。すなわち、世界を頂点として、その下に大地域——アジアやアフリカ、アメリカ大陸など——があり、続いて領域が非常に明確に画定された国家という地域、さらに国のもとにさまざまな地域——〈地域政策〉というときに想定されている単位——があり、末端に〈地方〉という地域があった。日本史の場合には〈地方史（じかたし）〉というかたちで地方性＝ローカル（local）や在地性＝インディジナス（indigenous）という地方世界を説いてきた試みもある。

右側の円環図では、地域関係のネットワーク化を示している。この地域連関の特長は、

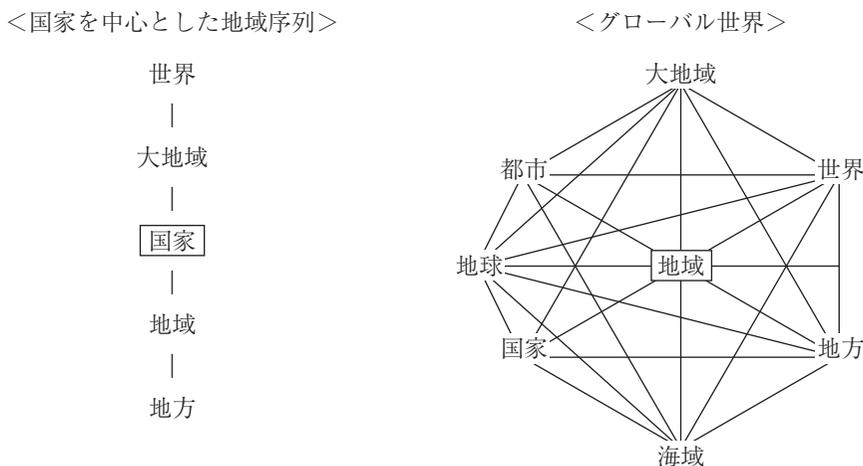


図1 地域空間系列の変化

グローバリゼーションが世界を地球規模で大きくしたというだけでなく、従来の縦系列の空間関係をすべて地域間の相互関係に置きなおしてしまったことを意味している。したがって、地域研究の重要性がよりいっそう前景に登場してくることとなる。ここでの地域研究とはローカルな地域だけではなく国際的な地域関係をもその視野に含むものであり、ローカルをグローバルに直結させ〈グローカル〉などと表現されるように、新たな地域間関係の組み合わせを示したものである。これまで国家を基準としてそれより上位の地域と下位の地域とされてきたものが、〈地域〉という一つの概念をめぐって大小のいろいろな地域関係が自由に交渉・交流をはじめたわけである。このことがグローバリゼーション下における地域間関係の変化の一番大きなポイントではないかと考えられる。

したがって、国家のもとに今までと同じような地域があるという理解では、グローバリゼーション下の地域の新しい主体形成という問題にはつながらない。地域の価値基準、地域の内部からの目を強調する視点が現在では前提とされているが、しかしそれを実際にどのように具体化するのかというとき、また難問にぶつかる。ローカルな動きの地域研究では、一気に個別のケース・スタディーが進められ、たとえば「大地域」というかたちで中国の市場構造を捉えるようなウィリアム・スキナー (G. William Skinner) の重層する地域像にまでは展開していかなかった。これまでの地域をこれまでの枠組みのもとで同じ観点から考えるということでは現在においては不十分であろう。

### 3. 変化する地域主体と新たな地域研究

以上に検討してきた問題意識から、地域の主体を地域研究はどのように考えるかということについて考えてみたい。これは同時に、地域主体のあり方、どういう地域主体を作っていくのかという問題を考えるときの枠組みでもある。

今まで地域社会——実際には国家の範疇と同じではあるが——は、図示したように、〈官〉と〈民〉、〈利益〉と〈非利益〉という2つの交差する座標軸で考えてきた(図2参照)。今までの地域社会では、第1象限の〈非利益〉と〈公〉の部分、つまり〈官〉のところに政府がくることとなる。これは中央政府でも地方自治体でもよい。また〈民〉と〈利益〉の部分には企業が当てはまる。ひとびとは企業で働いて収入を得、そこから税金を払い、国家がそれを集め、それを社会に再配分する。こういうルーティンの末端に地方は組み込まれていた。しかし現在の地方や地域の状況はもはやこの位置からのみでは把握しきれないより個別性を持ったものとなりつつある。たとえば、今までは公が利益を得るということは否定されており、それは賄賂などと結びつけて考えられていた。しかしいま地方自治体が少子高齢化する地域を考えると、高齢化や地域労働人口の減少などを勘案すると、ある程度、地域の独自採算のための収入源を考えなければならない。そのために最小限の収入を得ることができるような経済活動をおこなうことが余儀なくされる。かつて第

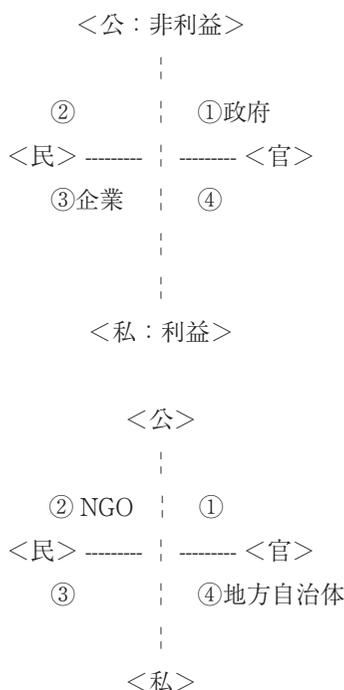


図2 公私関係・官民関係の流動

三セクターというかたちが試みられた例もあるが、現在ではより底辺の地方社会レベルでそれをどう考えるのかということが問題となっている。

また、これまでは明示的に存在しなかった第2象限の位置である〈公〉と〈利益〉の組み合わせのところには、NGOやNPOが入っている。このことは、今までの政府と企業の関係を中心にして考えられてきた地域関係・地域社会が、現在では、地域社会が納税してその財源が国を通してさらに配分されるという関係のみではなく、規模の大小を問わず自分たちが必要と思う部分に自分たちの資金を投入するというかたちが登場していることになる。このような政府を介さない地域主体・地域活動が登場してくることを想定すると——もちろんそれは国家がただちになくなるということの意味するわけではないが——地域の役割、地域の主体が持つ重要性を新しい社会主体・歴史主体の登場の問題という視点から考えられるようになると思われる。地域を地域主体の側から見る、地域を地域研究する、ということは、このような新しい地域主体はどのようにあり得るのか、新しい地域研究が生まれるのかということを考えることでもあり、それが地域研究が目標とする一つの課題なのではないかと考えられる。

一つの例を挙げると、大分県の平松知事が提唱した一村一品運動では、一村という空間と一品という商品、それをあわせて一村一品という象徴的なまた身近で普遍的な表現がと

られた。実際に全国で3,000以上の“一品”がでてきており、圧倒的に多いのは農林水産物の加工品であるが、現在では国際的にももっと増えているだろう。一村一品運動の〈一村〉の範囲を見てゆくと、現在の行政範囲の一村ではなく、江戸時代の地域の空間を単位としている一村が少なからずあることがわかる。歴史的な地域の資源を再発掘して加工品が作られ、あるいは地域の自然条件の特徴を利用して一品が出てくる。また、別府の温泉を使っとうなぎの短期速成養殖は、中国の郷鎮企業にも導入されたこともあった。

このように地域が持っている歴史的な蓄積や技術、また生活のサイクルという空間認識は、一面ではイマジナリーなものでもあるが、実体としての地域がどのように機能しているかということを経験主体との関係で考えることが可能であるということを示す一つの良い事例であろう。したがって地域研究を地域化するということは、一面ではどのような地域空間を開拓するのか、どのような地域主体を発見するのかという問題につながってくるわけである。

#### 4. 海洋視野からの地域研究

いま私が地域連合の事例として注目しているのが、UBC (Union of Baltic Cities) というバルト海沿海の都市連合である。これはEUの下部の一つの連合組織であるが、10か国のメンバーと1か国のオブザーバーから成り、約105の都市がそれに参加している。テーマに応じて関心を持つ都市が集まって会議を開く。たとえば海港都市における巨大建築物・高層建築にはどのような問題があるかというテーマ——これは環境に関係する——や水資源に関係するテーマなど、地球規模のテーマをローカルな都市連合が議論するという仕組みもある。もちろんそこにはバルト海の沿海都市における中世のハンザ同盟以来の長い歴史的伝統があり、商業・商人のネットワークの歴史も大きな影響を及ぼしている。

ひるがえって島根県あるいは日本海の沿海について見てみると、北東アジアにおける沿海都市ネットワーク形成も具体的な検討課題に入ってくると思われる。島根県立大学にはすでに「海洋ガバナンス」についての研究蓄積があり、海洋という観点から西日本と大陸部、半島部、島嶼部をまたぐ環海の港湾都市ネットワークに基く地域連合の課題はすでに視野の中に入っていると思われる。ある地域の問題を陸の視点のみではなく、海洋の視点すなわち「海域」の視点から取り上げる研究が新しくもたらす課題も大きいと思われる。

これまで人間の生活は主に陸のうえで営まれてきた。また国家間関係も陸のうえで形成されてきたため、当然のように世界は陸を中心として考えられてきた。しかし、グローバリゼーションのひとつの大きな問題提起は、海洋や海域が人間生活に対してきわめて大きな影響を与えているということをはっきりとしたことである。海洋の作用を抜きにしては、温暖化に直結する炭酸ガス排出を吸収できないという議論のみではなく、海産資源や海底資源の問題においても、これから海洋が一層重要になってくることは確実であろう。また

事実、温暖化の影響によって本来南洋の魚が北上してきているという調査報告もなされている。

私の対象としている地域は、中国華南と東南アジア、沖縄・琉球、西日本（九州・四国・中国地方）、朝鮮半島へと連なる九州・琉球など海を跨ぐ環海の地域である。個別の地域研究をおしすすめつつ、個々の地域研究をどのようにネットワークでつなげていくのかという課題であるが、そこでは海洋・海域をめぐる視野が不可欠である。また分析の方法について考えてみると、陸をつなぐ手段や場として海洋が存在するのではなく、沿海や環海など海域そのものの構造と動態が検討される必要があるということを痛感する。全体として、海洋研究は、現在のグローバリゼーションに改めて対応した議論をおこなう場として海洋研究の視点から、従来の地域問題を構想しなおす方法であるともいえよう。

## 5. 地域研究と学問分野

地域研究・海洋（海）域研究の両者に関連する学問分野・研究分野として、〈東洋史〉という学問分野の歴史に注目している。東洋史はどのように明治末期に日本に興ったのか、またとりわけ京都大学において始められることになったのか。東洋史は〈東洋〉という海を表現する言葉を使っているが、実際には地域を表現している。また〈東洋〉という言葉は歴史的には中国からみると朝鮮・日本・琉球を指しており、とりわけ日本のことを指してきた。それが日本で換骨奪胎され、東洋は西洋と対応させるものとして、そして同時にアジア・中国と日本を対比（乖離）させる視角としても展開されてきた。

また西洋化を推し進めるなかで日本がアジアで歴史的な拡張主義を展開する時代、すなわち「軍国主義」の時代においては、「東洋史は書き直し」というタイトルが当時の新聞紙上に見られる。たとえば日本軍が各地に侵出するたびに、東洋史を書き直さなくてはならない、と表現された。このような、〈東洋史〉の“学術的”ではなく“社会的な”使われ方も見られる。東洋史の学問分野としての歴史を見ると、明治知識人が試みてきた、あるいは西洋や中国の歴史的な“中心性”を換骨奪胎して主張されてきたアジア論の展開とも重なっている。現在の日本における地域研究を学問分野として検討しようとするとき、とりわけ広域地域の研究課題として検討しようとするとき、「東洋」や「アジア」などの地域主義さらには地域排外主義に関する歴史的検討の必要性を示していると考えられる。

地域研究における情報の問題にもふれておきたい。現在では現地調査をしなくてもオンラインで地域の情報が豊富に集められるということも事実である。このことによって、地域が持っている考え方がオンラインで情報化されることになる。このことは、地域をそのままグローバルに発信できることを意味するとともに、地域に固有の思想の検討がおろそかにされるという結果をもたらしてきている。つまり、思想・文化の領域が情報量の多寡という状況に置き換えられてしまっているということである。そういった中で私たちが地

地域研究を発信していくときには、一つの個別ケースを提示するというだけではなく、それが持っている必然性や環境条件、他地域との比較、これから必要な課題、あるいはそれを前提として次に何をこなうかという点など、系統性や相互関連性を考えることが強く問われているように思われる。

次に華僑・華人研究を例に考えてみると、これまでの華僑・華人研究は、19世紀から本格的に始まる中国華南から東南アジアへの移民を主な対象としていた。あるいはそれをよりさかのぼってゆく研究である。しかし現在の華僑・華人の移動は極めてグローバル化している。とくに1980年代以降は、たとえば朝鮮半島・韓国からの移民や、ベトナムなど東南アジアからのアメリカへの移民も増大している。欧米においても同様である。そして、このような世界的なひとの移動の循環を最終的にはアメリカが吸収してきたという歴史がある。市場至上主義のアメリカ経済へ収斂していく労働力移動は、今後のアジア社会にとってはたしてどのような意味を持つのか。この観点から考えてみると、アメリカに(例外的に)代表される市場経済を中心とした社会がグローバル化した結果、市場があまりにも社会と社会生活の中に入り込みすぎてきたという現在の状況をどのように地域の視点から、また長期の歴史的視点から位置付け直すかという課題が導き出される。すなわち、市場の動きによって社会が直ちに影響を受けるという状況は、社会自身が保持してきた連続性や歴史的な蓄積に照らして、あるいは社会は維持されなければいけないという前提のもとではどのように考えてゆくのかという課題が地域研究の側に強く問われている。したがって先にふれた新しい地域主体をどのように作っていくのか、新しい地域主体がどのような可能性をもっているのかという問題が改めて重要となると考えている。この意味においても、私は島根県立大学の戦略、島根県立大学の持っている地域的な特徴とそれを活かした交流、学問性と地域性、あるいは宇野教授のおっしゃった実務性と学問性の問題は、今後、地域研究という枠組みのなかで考えられていくべき課題であると思う。

## 6. グローバリゼーション下の地域研究

地域および地域研究に対するグローバリゼーションの最大の影響は、従来地域間関係に見られた重層性をすべて同類の「地域」一般として解き放してしまったところにあると先に論じた。グローバリゼーションによって世界が一つになったという面ももちろん大きい。地域を解き放したということ、つまりいろいろな地域がこれまでのヒエラルヒーのなかの序列を離れて、いろいろな多様なかたちで交渉ができるようになったということが、やはりグローバリゼーションの大きな状況であると考えている。いいかえるならば、ローカルがグローバルに発言できる、グローバルに対して直接問題提起できるという状況にもなったともいえる。そういう点で、地域研究に幅ができたということも可能であり、同時にまた地域研究に対して、さまざまな新たな課題や条件が出されてきているように思われ

る。

その中でグローバル・ヒストリー（Global History）、あるいはグローバル・ヒストリー・スタディーズ（Global History Studies）という問題圏がアメリカを中心に現れてきた。これはアメリカの研究者がきっかけとなって現れた動きではあったが、そこで扱う対象は、アメリカ合衆国からではなくアメリカ大陸そのものをグローバル・ヒストリーの一つの出发点とし、たとえば南米のさまざまな物産がいかに世界をつなげていったのか、またメキシコ・スペイン時代におけるアメリカ大陸の銀がどうかたちで世界経済をつなげていったのかということを追ってゆくものである。このようにグローバリゼーションの問題は歴史研究にも影響を及ぼしており、グローバルな視点をどうかたちで歴史研究に投影するのかを追究する作業が続いている。この状況のもとでは、これまでの国家の下に序列化された地域が突然世界的な関係の中におかれることとなる。日本銀の世界的な役割などもその一例であり、たとえば石見銀山の世界的な役割を位置づけ直すという議論にもつながってゆく。帝国植民地時代の議論をグローバルという視点から見直すという点においては、ある意味では西洋中心のオリエンタリズムという側面もあると言えるが、同時にアジアが独自に16 - 18世紀にはグローバルに役割を果たしており、グローバル史の中に位置を占めていたというG. フランクなどの議論も提示されている。

このようにグローバリゼーションの現実が地域研究を衝き動かしたということ、またそれに基づいてグローバル・ヒストリーがアメリカ大陸からいわば世界史をもう一度読み直すかたちで提示されてきたということ、これらが現在の特徴であろう。グローバリゼーションがどうかたちでグローバルな歴史認識に影響を与えたのかという視点から、金融をめぐる問題や移民研究に対する問題が再提起され、グローバリゼーションの新しい特徴として、旧世代の労働移民を中心とした移民だけではない資金や技術を持った新移民という新たな特徴が示されてきている。

### おわりに——「地域」は「知域」に通ずる：地域研究をめぐる新たな課題——

グローバリゼーションのもとで浮かび上がってきた大きな課題が、環境問題や生態問題と情報化の問題である。これらは、個別な問題が同時にグローバルである、という現象についての具体的なテーマを提供してきた。また、グローバリゼーション研究とそれに衝き動かされた地域研究にかかわる学問分野も、国際関係・歴史のみではなく、人類学や社会学、それに社会心理学におけるアイデンティティ論、さらにはディアスポラ（diaspora）などへも広がりつつある。したがって、たとえば北東アジアを考えるにあたって、そこにおける環境・生態・経済問題などさまざまなディシプリンから北東アジアはどのように見えてくるかということの研究の側が絶えず意識化していかなければならないと同時に、グローバリゼーションそのものが私たちに学問手法の組み換えと新しい総合を要求してい

るといえるのではないだろうか。

グローバリゼーションは、空間軸の変化・多様化に対して圧倒的に大きな影響を与えている。それにある程度対応したあり方、かかわりを考える際に、〈地域〉という対応軸が出てくる。これはいろいろと議論されているように、固定された地域ではなく、むしろ重層的・動的な地域である。また、地域研究を地域化するという課題が出てくるなかであって、地域が持っている知識あるいは情報資源がどのように共有されるのかということは、地域を考える知識人にとって非常に重要な問題になってくるだろう。これは、「地域」を「知域」として形成する課題につながってくる。

地域アイデンティティの問題は、これまで社会科学・人文科学が対象の事実認識を軸に研究方法を設定してきたことに対して新たな問題を投げかけた。帰属感＝アイデンティティの議論では、これまでナショナリズムに収斂してきた排他的な地域アイデンティティではなく、地域間で交渉し、交流する地域として、やはり相互認識によるアイデンティティ形成が問題となってくる。相互認識・相互交渉のあり方がある地域の帰属感になるのである。いわば地域ネットワークのなかで、交流を前提としてそこから何を生み出すのかを考えることが求められていると考えている。

さらには価値評価の軸も変化しつつあり、変化する状況を前提として地域研究をどのように評価するのかという問題がある。研究である以上はやはり客観的に評価できなければならぬ。トルコからバハドルさんという方が留学して、ネットワーク論で博士論文を書いた。さきほどの宇野教授のお話の中に「スモール・ワールド」、小さな世界ということばが出てきたように、6人を結んでいくと世界中の誰にでもつながる「小さな世界」という認識である。バハドルさんは、自然科学におけるネットワーク論を社会・人文科学で議論されているネットワーク論と比較し、またそこに導入して、国際関係的な視点からネットワークの議論を歴史的な広域地域秩序や地域間関係に当てはめて議論するという課題に取り組んだ。

私はバハドルさんの研究から、ネットワークの検討は、つながりを見つけ出すというだけでなく、つながりの根拠や環境条件は何かという視点について深める必要があるという重要な示唆を得た。現在のように多様化している社会的状況において、ネットワークという条件のもとでいかなるつながりが浮かび上がってくるかというアプローチである。

さらに国際政治では、ネットワークについてより原理的な見解もある。すなわち、制度や規則よりも強く、現代世界は政治・経済・社会・軍事などすべてにおいて、ある意味ではネットワークががんじがらめにアクターを縛りつけているというネットワーク論も *Foreign Affairs* などに掲載されている。たとえば戦争も社会もすべてネットワーク化して、人々はがんじがらめになっているという意味でのネットワークという用法である。私たちはネットワークを組織やマーケットと比して中間的な特徴をもったものであると考えがちであるが、そういうことではないというネットワークの議論もある。

以上に見てきたように、地域関係をめぐる議論はますます多様化しており、あらゆることが対象となりうるという様相を呈してきている。こういう状況の中で、私たちがそれを研究の対象としてどのように選択し、時代的・論理的に位置づけるのか、あるいはモデル化するのかということが改めて問われている。それは個別研究を深めれば自動的に答えが出るという類の問題ではないのではないと私自身は感じている。今われわれが大きな時代の転換の中に置かれているという共通認識の下に、すなわちグローバリゼーションの動きに衝き動かされた従来の領域と領域概念が変化している中で、地域の多様性を、「地域の重層性」、「地域連関ネットワーク」という枠組で捉えること、拡大し同時にまた収縮する境界なき地域化という状況の中での「地域アイデンティティの追究」など、地域研究と様々な格闘するという課題が私たちの目の前に共通にあるのではないだろうか。

## 参考文献

### < A 叢書 >

宇野重昭・勝村哲也編『海洋資源開発とオーシャン・ガバナンス—日本海隣海海域における環境』（国際書院、2004年）

大江志乃夫ほか編『近代日本と植民地 全8巻』（岩波書店、1993）

尾本恵市ほか編『海のアジア 全6巻』（岩波書店、2000-2001）

辛島昇ほか編『地域の世界史 全12巻』（山川出版、1997-1999）

末広昭編『「帝国」日本の学知 第6巻 地域研究としてのアジア』（岩波書店、2006年）

原暉之ほか編『講座 スラブの世界』（弘文堂、1994）

平野健一郎ほか編『講座現代アジア 全4巻』（東京大学出版会、1994）

溝口雄三ほか編『アジアから考える 全7巻』（東京大学出版会、1993-1994）

### < B 単行書 >

赤嶺守『琉球王国』（講談社選書、2004年）

宇野重昭・唐燕霞編『転機に立つ日中関係とアメリカ』（国際書院、2003年）

鹿野政直『「鳥島」は入っているか 歴史意識の現在と歴史学』（岩波書店、1988年）

川勝平太編『海と資本主義』（東洋経済、2003年）

木村正弘『鎖国とシルクロード』（サイマル出版会、1989年）

国分良成『世界のなかの東アジア』（慶応大学東アジア研究所、2006年）

白石隆『海の帝国：アジアをどう考えるか』（中公新書、2000年）

関根政美・山本信人編『海域アジア』（慶応義塾大学出版会、2004年）

立本成文『地域研究の問題と方法—社会文化生態力学の試み』（京都大学学術出版会、1996年）

角山榮『堺—海の都市文明』（PHP新書、2000年）

富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』（日本経済評論社、1990年）

濱下武志『沖縄入門』（ちくま新書、2000年）

包茂紅著、北川秀樹監訳『中国の環境ガバナンスと東北アジアの環境協力』（はる書房、東京、2009年）

馬大正、劉逖『二十世紀的中国辺疆研究——門発展中の辺縁学科的演進歷程』（黒龍江教育出版社、1998年）

水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』（山川出版社、2008年）

百瀬宏ほか『環バルト海』（岩波新書、1995年）

- 百瀬宏編『下位地域協力と転換期国際関係』（有信堂高文社、1996年）  
芳井研一『環日本海地域社会の変容』（青木書店、2000年）  
和辻哲郎『風土—人間学的考察』（1935年）（岩波文庫、1979年）  
C. R. Boxer, *The Dutch Seaborne Empire, 1600-1800*, New York, 1965  
Caroline Cartier, *Globalizing South China*, Blackwell, 2001  
Fred W. Drake, *China Charts the World: Hsu Chiyu and his Geography of 1848*, Harvard University Press, 1975.  
Arif Dirlik ed., *What is in a Rim? : Critical Perspectives on the Pacific Region Idea*, Lanham, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.  
Grant Evans, Christopher Hutton, & Kuah Khun Eng, ed., *Where China Meets Southeast Asia: Social & Cultural Change in the Border Regions*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, 1999  
Peter J. Katzenstein, *A World of Regions*, Cornell University Press, 2005  
Ng Chin-Keong, *Trade and Society: Amoy Network on the China Coast 1683-1735*, Singapore University Press, Singapore, 1983  
Roderick Ptak and Dietmar Rothermund, *Emporia, Commodities and Entrepreneurs in Asian Maritime Trade, c. 1400-1750*, Stuttgart, 1991  
G. Willam Skinner, Marketing and Social Structure in rural China, Parts I, II and III, *Journal of Asian Studies*, 24, 1(Nov.1964); 24, 2(Feb.1965); 24, 3(May.1965).  
Stein Rokkan and Derek W. Urwin eds., *The Politics of Territorial Identity : Studies in European Regionalism*, Sage Publications, 1982.

キーワード グローバリゼーション 地域政策 新たな地域主体 海域と地域 知域と地域

(HAMASHITA Takeshi)